



育成講座

報告書

障害者

障害者による文化芸術活動推進事業令和元年度 文化庁委託事業

はじめに

この事業は令和元年度文化庁委託事業として、アーツカウンシルみやざき (公益財団法人宮崎県芸術文化協会) が実施しました。天の岩戸から天照大御神を引き出すために、踊りで神々を笑わせて盛り上げた天鈿女命になぞらえて、障害のある人が太陽を引っ張り出す存在になってもらいたい、そんな願いを込めました。

この事業は4つの大きな柱によって成り立っています。

- I. 文化芸術を障害のある人の仕事としての可能性 を探る「ダンスステージをつくるワークショップ」
- 2. コミュニケーションから表現、そして仕事を考える「レクチャーシリーズ」
- 3. 障害のある人もない人も、誰でもが集まる拠点の 運営
- 4. 文化によるソーシャルインクルージョンと題した シンポジウム

アーツカウンシルみやざきは令和元年6月に設立しました。人も繋がりも資源も足りない中、この事業を実施したのには理由があります。令和2年には国民文化祭・全国障害者芸術文化祭 宮崎大会が行われます。また東京オリンピック・パラリンピックを控え

る中、あらためて社会包摂とは何なのかを考える機 会が必要でした。

障害のある人には、私達が学ぶべき振る舞いや、考えがあります。私達が想定できない行動ができる豊かな人達です。しかし、多くの人にとって、障害のある人たちの行為や表現に触れる機会はほとんどありません。お互いを理解するためには対話が不可欠ですが、言葉はヒエラルキーや分断を生むことがあります。ビジネスで使う言葉、子供に対して使う言葉、目上の人に対して使う言葉。言語によるコミュニケーションは使い分けているように見えて、そこで起きている分断に私達は無自覚なものです。

分断を超えていくのは簡単ではありません。しかし、まずは思い知ること。互いの思いを知り、そして考え、感じる機会。上に上げた4つの柱は、そのために必要な最低限の内容でした。

この報告書が、宮崎の社会包摂、文化によるソーシャルインクルージョンの礎となることを願っています。

令和2年3月 アーツカウンシルみやざき プログラムオフィサー 山森達也







non verbal cue for social inclusion

まちなかワークショップ等による障害者の創造活動支援事業

期間 — 2019年12月10日~2020年3月23日

主催 ― 文化庁、アーツカウンシルみやざき (公益財団法人 宮崎県芸術文化協会)

協力 — 宮崎県障がい者芸術文化支援センター、社会福祉法人 いつか会

天鈿女命育成講座 報告書

ダンス	ステージを	つくるワークショップ	P6
REPORT 1	12.15 (日)	オリエンテーション	P7
REPORT 2	12.22 (日)	んまつーポスの公演を観る	P7
REPORT 3	12.22 (日)	プロの仕事をみる	P8
REPORT 4	1.12 (目)	リハーサル	Р8
REPORT 5	1.19 (目)	本番	P9
レクチャーシリーズ			PI0
REPORT 1	1.6 (月)	対話と nonverval cue	PII
REPORT 2	1.18 (±)	表現は壁を超えて	PI2
REPORT 3	1.23 (水)	障害者が、自分の仕事を作る方法	PI3
REPORT 4	1.26 (±)-27	表現と障害~ナイトクルージング上映会~	PI4
拠点運営「いつかベース」			PI6
REPORT 1	1.6 (月)	アートステーションどんこや展覧会	PI7
REPORT 2	1.18 (±)	アートラウンジ「地域とアートと美術館」	PI7
REPORT 3	1.23 (水)	八田さんの展覧会	PI8
REPORT 4	1.26 (⊟)	村上仁君の展覧会	PI8
REPORT 5	1.27 (月)	ワークショップ「Connect chairs for inclusion」	PI8
シンポジウム「文化とソーシャルインクルージョン」 P20			
REPORT 1	2.23 (目)	事業報告「ダンスステージをつくるワークショ	ップ」
REPORT 2		事例紹介「都城市総合文化ホールの社会包括	事業」
REPORT 3		基調講演 播磨靖夫	
REPORT 4		パネルディスカッション	



事業開始前のねらい

仕事とは社会参画の方法の一つです。障害者の表現が注目される現在、それを仕事化するところまでたどり着いている事例はまだ少ないのが現状です。一般の社会においても表現や文化芸術が仕事として認識されることはまだ少なく、余暇活動や、趣味、好きでやっていると思われていることが多く見受けられます。日本では文化芸術がその程度にしか扱われていません。

仕事としての文化芸術を考えるには、まず表現とはなにか、表現に繋がるコミュニケーションとは何か。そこまで立ち返ったとき、初めて「文化によるソーシャルインクルージョン」の必要性が上がってくるのではないでしょうか。

文化とは、様々な分野、様々な人達を繋ぐ力があります。 クラスター化が進み、自分の知りたい情報を検索するだけの 昨今において、これまで対話をしてこなかった人や、関わら なかった分野と繋がることが求められています。文化が コミュニケーションの手段の一つであるとするならば、文化 の違いをどう理解するか、誰かが発信したものをどう受け取 るか、表現されたものをどう読み取るかという力と寛容性が 必要です。

この事業では障害者の芸術活動をテーマにしていますが、 それは裏返せば、私達の生活に直結するものだと思います。 社会と個人の繋がりを文化と仕事をテーマにしたのが「天鈿 女命育成講座」です。





講師プロフィール:んまつーポス

2006 年結成。逆さにこだわったコンテンポラリーダンスカンパニー。「逆さから物事を考えることで新たな価値を創造する」実践的研究を展開。だからカンパニーの名前もスポーツマンの逆さ読み。メインメンバーは、豊福彬文、みのわそうへい、児玉孝文の3人。「現代芸術的体育」の独自な作品スタイルは、海外フェスティバルも注目。これまでに世界13カ国35都市で作品を上演。2019年3月には"公立ではない公共の劇場"の可能性を拓くことを目的に「透明体育館きらきら/国際こども・せいねん劇場みやざき」(愛称:CandYシアター)を宮崎市内にオープン。

障害のある人の仕事の選択肢に、文化芸術やアートに携わる仕事がほとんどありません。 障害者アートや、作品制作を行うことまではギリギリ認識されていますが、文化芸術に関わること を仕事として捉えるのは、現在の障害者の就労の中では難しそうです。どうやら、障害福祉にお ける芸術教育の現状に理由がありそうです。文化芸術が楽しみや余暇活動ぐらいにしか思われて いない、そしてそれは、私達の一般社会でも同じことです。障害のある人に限らず、自分たちの 興味関心、創意工夫が仕事につながっていく、その仕事が積極的に関わりたいと思えるものであ

ればあるほど、自己肯定感、自尊心を育てていくことになります。

宮崎に拠点を置き、国内外で活躍するコンテンポラリーダンス集団「んまつーポス」。彼らに言われたのは「ダンスが障害のある人の仕事にならないだろうか」という一言でした。障害のある人が踊るワークショップは全国に多くありますが、舞台の裏方や、サポートを担うワークショップはほとんどありません。障害のある人にとって、文化芸術が仕事の選択肢になるためのワークショップは、試行錯誤と創意工夫の場になりました。

$\frac{\overline{REPORT}}{1\atop 12.15.sun}$

オリエンテーション

「本番で音や照明をやってもらうのは、あなた達です」といわれた2人の小学生。驚いた表情でんまつーポスの話を聞いていました。普段は見られない劇場の裏側を見たり、機材の説明を受けたり、ケーブルを運んだり、差込口を入れ替えしながら楽しそうな表情に変わり、はじめてスピーカーから音を出したとき、照明をつけてみた時、心から喜んでいるのがわかりました。

音は出るもの、照明はついているものと当たり前に思っていたことが、当たり前じゃないことに気づいたり、自分が、それができるとは思ってもなかったことができるようになった喜びが彼女らを変えていきました。













2 12.22.sun

んまつーポスの公演を観る

「私のつけた照明!」会場にやってきた2人の参加者は、本番の仕込みが終わった劇場を眺めて「舞台がかっこよくなった!」と嬉しそう。前回のワークショップで繋いだ照明がつくか、音がなるかどうかを確認し、照明と音響のテーブルに一番近い席に座りました。んまつ一ポスのダンスも今までに見た目線とは違うものに見えている様子です。何より、プロの照明や音響によってさらに輝くステージに目を輝かせる様子の2人。公演後のワークショップでは照明家・音響家さんに質問するという宿題がありました。これまでの楽しむだけではない視点でステージを見つめる彼女らには、自分ならどうするだろうか、できるだろうかという意識が生まれていたようです。

REPORT 3 12.22.sun

プロの仕事をみる

「照明をつける時に迷うことはありませんか?」

「照明もダンスと同じぐらい練習が必要で、練習して身体で 覚えることができれば大丈夫です。」

この日の公演で照明をしていた大園康司さん、そして音響をしていた大野源喜さんをゲストにお迎えしました。

さっきまでやっていたパフォーマンスの | シーンを切り取って、ステージ上で踊るんまつーポスの動きに合わせ、プロに教わりながら光と音をステージに繰り広げていきます。操作をしている時は、少し緊張した表情を見せる参加者も仕事を終えると達成感溢れる表情に変わっていきました。それぞれの役割を担当した後に、照明と音響どちらを担当したいか尋ねてみたところ、「私は、照明の方をやってみたいです!」「うーん。音の方がいいかな~」。役割が決まった2人は、次回、いよいよりハーサルです。













4
1.12.sun

リハーサル

このワークショップがうまくいった理由の一つが、講師をんまつーポスにお願いしたことです。彼らは全国、そして海外で活躍するコンテンポラリーダンス集団であるということ、そして自分達の劇場を構えているということ。違う場所で行っていたら、本番も含めここまで充実したワークショップにならなかったと思います。この日はリハーサル。色々と教えてくれる存在のんまつーポスが、一緒に舞台を作るパートナーとなります。んまつーポスの指示に従うのではなく、お互いに呼吸を合わせながら、一緒にステージを作るワークショプになりました。当たり前なんですけど、ワークショップって本来そうゆうものなんだ、と思います。

本番

1.19.sun

この日、公演にくるお客さんたちは、んまつーポスの公演をお金を払って見に来るお客さんです。「障害のある子のお仕事」ということは、特にアナウンスしませんでした。障害があるからしょうがないよね、頑張っているからね、そういう姿勢が、実は社会包摂を実現しにくくしています。仕事というのは責任感や自分の役割を大事にすることだと思います。他でもなく、彼女らの姿はそう見えました。

お客さんは 100 人以上の超満員。実は、自分たちが照明と音響をやることを、学校のみんなや先生にチラシを撒きながら話していたと聞きました。芸術とは相手がいて初めて成り立つもの。この日のステージを一緒になって作るお客さんを、彼女たちが集めてきてくれたことに驚きました。







まとめ

人が社会という巨大な関係性の中で成り立つ存在で あればあるほど、文化芸術の力は発揮される

社会生活において、仕事、責任、役割というものが、いつの間にかネガティブなものになっていることがあります。自分の役割があるということはポジティブなことなんだということを、このワークショップを通じて、小さな2人の小学生に教わりました。彼女らは自分たちで考え、自分たちで試行錯誤を始めていきます。使っている機材はもちろんプロ仕様。だから遊びながら、遊びじゃない感覚。楽しみながらも、仕事として体感する時間になりました。

憧れや好きなことを仕事にしていくことは容易いことではありません。しかし、経験する機会は誰にでも平等であるべ

きだと思います。社会包摂がなぜ必要なのか、それは障害のある人に対する機会の不平等を変えていくことが必要だからです。障害がある人に変化をもたらし、私達の中での変化や気づきを与えてくれるのに、文化芸術、そしてアートは有効だと、このワークショップを通じて思いました。文化芸術の力はそこにいる人たちの変化だけではなく、関係性を変え、その変化が社会を変えていく力になります。人が社会という巨大な関係性の中で成り立つ存在であればあるほど、文化芸術の力は発揮されるのだと、このワークショップを通して考えました。







このレクチャーシリーズは、対話から表現、そして仕事というテーマでつながるように組み上げました。「vol.01 対話と nonverbal cue」では対話をテーマに、「vol.02 表現は壁を超えて」では表現をテーマに、「vol.03 障害者が自分の仕事を作る方法」では仕事をテーマにしました。そして、3つのテーマを実践的に考えるために行ったのが「vol.04 表現と障害~ナイトクルージング上映会~」です。

このレクチャーシリーズでは総勢7名のゲストの方をお招きし、みなさんがそれぞれの現場で「文化によるソーシャルインクルージョン」をされている方です。これだけのゲストの方をお招きする機会は、これまでの宮崎にはありませんでした。そのためゲストの方を知らない、テーマが分かりづらいという声もあり、参加者は決して多くありませんでした。しかし、ただ話を聞くだけではなく、参加者個人がゲストの方と繋がり、一緒に何かを始めるような機運が見受けられたのは、このレクチャーシリーズの一番の成果だと思います。

社会包摂とは実践であって、キャッチコピーではない。このレクチャーに参加してくれた方たちが、 宮崎における社会包摂の担い手となること、そしてそれぞれの取組が全国につながっていくことを 期待できるものになりました。

1.6.mon

対話と nonverval cue



言葉7% 音38% 表情55%

「バナナ」の一言で相手に感情を伝えることの難しさ。障害のある人のおでこに触れ、行政職員のおでこに触れる。永山智行さんにお願いしたワークショップは、nonverval cueをテーマに、20名ほどの参加者が様々なコミュニケーションをしあうユニークなものでした。知らぬ間に関わりと対話について感覚で理解する時間になりましたが、実はメラビアンの法則を体感する丁寧なワークショップでした。その後、田中真実さんが活動している ST スポット横浜の紹介と、社会包摂と表現をテーマに議論を行いました。ST スポット横浜は劇場を持ちつつも、障害のある人に向けた文化事業を横浜市内全域で行っており、その活動は全国から注目されています。

物語を見つける作法

なぜ、障害者にアートを?という質問を投げかけたとき「文化は文化だけでは成り立たない」「生活インフラとしての文化芸術」というキーワードが出てきました。今回のレクチャーのテーマである対話やコミュニケーションについて伺ったところ、

永山「井上ひさしさんが『日本には広場が足りない』と言っていた。多様な人に出会う小さな広場がたくさんあったらいいなと思う。今の世の中は過剰な善意が、人との出会いを奪ってしまっている。」

田中「コミュニケーションを取り上げるとき、発信のことばかり議論されるが、本当は受信の問題だと思う。これだけ

誰もが発信している中で、受信をどのように行うのか、受信をどう考えるということは議論されることが少ない。」 永山「コミュニケーションは物語を見つけられるかの話だと

思う。カーナビは目的地に行くことしかできない。寄り道をすることで出会いが生まれる。関わる機会が生まれる。 受信という話が出たが、物語を見つける作法を身につける ことが大事ではないか。」と答えていただきました。

コミュニケーションから社会包摂を考えたとき、文化に求められるキーワードがたくさん生まれるレクチャーでした。

永山智行(ながやまともゆき)

劇作家/演出家/劇団こふく劇場代表



1967 年 都 城 市 生 まれ。2001 年 『so bad year』で AAF 戯曲賞受賞。同作をはじめ、戯曲は劇団外で の上演も多く、2005 年に東京国際芸術祭参加作品として書き下ろした『昏睡』は、2009 年には、青年団の中心的俳優、山内健司・兵藤公美の二人芝居として、神里維大(岡崎藝術座)演出により上演された。また地点の演出家・三浦基との共同作業とて、『お 伽 草 紙 / 戯 曲』(劇団 うりんこ・2010)、『Kappa / 或小説』(地点・2011) の戯曲も担当した。

田中真実(たなか まみ)

認定 NPO 法人 ST スポット横浜事務局長 横浜市芸術文化教育プラットフォーム事務局長



1984 年東京生まれ。お茶の水女子大学卒業。東京工業大学大学院社会理工学研究科修了。大学では地理学を大学院では都市計画を学び、地域と芸術文化の関わりについて関心を持つ。2008 年よりNPO 法人STスポット横浜地域連携事業部にて、アートと学校の現場をつなぐコーディネーターとして活動。2017 年より神奈川県と協働し、福祉現場と芸術をつなぐ活動を開始している。

1.18.sat

表現は壁を超えて



いつもの鎧を、一度脱いでみる

「まず、今日呼んでほしい名前を考えてください。それで自己紹介しましょう。」上田假奈代さんによる詩のワークショップと、俳句のワークショップの二本立ての回。両方に共通したのは、自分が呼んでほしい名前を自分で考えることから始まりました。自己紹介が終わるたび、みんなでその名前を呼びます。呼ばれたら「は一い!」と返事をする。この一連の流れが恥ずかしい。呼んでほしい名前で呼ばれることで、これまでの経験や、他の参加者との関係を一度脇において、同じ地面に立ってみることができます。それは服を脱ぐような、一度裸をさらけ出すような恥ずかしさがありました。でもそれは他の参加者も一緒です。ちなみに出た名前の一例はこんな感じ。「メガネピアスマン、立ち飲み屋、白いライオン、グリ、超絶イケメン、ドサ回り、反社がなんや、すぎちゃん、すごい頑張ってるよ最近、超助平、ウッチー」

表現を介して、生き方を面白がる

ワークショップの会場として「あわいや」をご提供いただきました。上田假奈代さんの対談相手をお願いした「あわいや」代表の生駒新一郎さんが驚かれていたのが、とある利用者さんがワークショップで初めて絵を描いたこと。上田さんの誘う力のすごさだと話をしてくれました。夜に行ったレクチャーでは上田さんが行っているココルームの活動の紹介をしてもらいました。宮崎にはドヤ街がなく、路上生活者も少ない。そのため、ココルームの活動が伝わりにく

いのではと不安でした。しかし井戸堀りの話は参加者の関心が高く、面白いとみなさん口々に言っていました。井戸掘りに関わった釜ヶ崎のおっちゃんたちは、様々な経歴を持っていて、実はすごくクリエイティブな人たちで、釜ヶ崎は創造性の集積地なのかもしれません。ココルームには多様な人達が集まっていることが改めて不思議に思えましたが、生駒さんが言っていた「ココルームとは、釜ヶ崎での「表現」を介した、生き方を面白がる活動」という一言に表されています。そしてこの一言には表現による社会包摂の必要性が表されているのではないでしょうか。

上田假奈代 (うえだ かなよ)

詩人、詩業家、NPO 法人こえとことばとこころの部屋代表理事



1969 年吉野生まれ。3 歳より詩作、17 歳から朗読をはじめる。「ことばを人生の味方に」と活動する。2003年、大阪・新世界で喫茶店のふりをした拠点「ココルーム」をたちあげ、2008年、西成・釜ヶ崎に移転。2012年、まちを大学にみたてた「釜ヶ崎芸術大学」、2016年「ゲストハウスとカフェと庭ココルーム」開設。大阪市立大学都市研究ブラザ研究員。2014年度文化庁芸術選奨文部科学大臣新人賞。

生駒新一郎(いこま しんいちろう)

一般社団法人あわいや代表理事



1966年宮崎市生まれ。1988年、書を始める。1997年、速さと結果に偏重する社会に疑問を抱き、システムエンジニアを辞職。1998年、アートステーションどんごり、と出合う。6年間ボランティアとして関わり、その後職員に。表現の原点に眼を向けるきっかけを得る。2014年「あわいや」設立。2017年「地域活動支援センター川型工房・あわいや」を開設。障がいある方と様々な表現活動を行い、創作の発表や地域交流の活動も行っている。

1.23.wed

障害者が、自分の仕事を作る方法



男と資本主義はあかん!

「自分のことばかり考えていると生命は破綻する」と言った 里見さんは、障害のある人の生き方や仕事を発信する季刊 誌「コトノネ」の編集長。里見さん自身が障害に関わるよう になったきっかけをこう語ります。「原核生物には寿命がな い。交尾ではなく分裂で増えていく。真核生物になって初 めて寿命が存在する。そこから、交尾、そして雄と雌が現 れてくる。実はこれは合理的ではない。自分たちのコピー を作り続けたほうが合理的。だから生物は進化の上で、非 合理的なもの、どうなるかわからないものに賭けたんだと 思う。単一の生命体では、何かあったときに全滅してしまう。 生命が生き残ることは、可能性を保たせること。生き残る ためには多様性が必要不可欠。だから障害がある人が生き ることは生命として大事なことなんだと思う。」そして、ヒエ ラルキーや立場で考えること、合理性を優先することが時 代遅れと語り、「男と資本主義はあかん!」という言葉は参 加者から絶賛されていました。

死への恐怖と、生きる欲望

2 人目のゲスト、鈴木一郎太さんの自己紹介は変わっていて、自分の経歴ではなく、自分が好きなイベントや事業を紹介。「私達は分野の中で区切ることに慣れすぎている。妥協してまで分野で区切ることは自分の中でザワザワしてしまうし、人はそんなに器用にできていない」と語ってくれました。この人はこういう人だからという区切りが、例えば障害者に対しては、一括に障害者という区切りをされてしまいま

す。「福祉施設のポテンシャルは、施設スタッフの側にあると思う。彼らが持つ障害のある人に対する目線が大事(鈴木)」「福祉施設はトライ・アンド・エラーの場。農業なら有機農法をやってみたり、資本主義にはない価値を作れるのではないか(里見)」障害と仕事をテーマに議論は膨らみました。会の最後には、会場から「人はなんのために生きるのか」という質問に、鈴木さんが参加したイベントで聞いた話を引いて「死への恐怖と、生きる欲望。これが生きる態度なのかな」と答えてくれました。仕事をテーマにした議論が、生命の根源から人の生死の話にまで及ぶ回となりました。

里見喜久夫(さとみ きくお)

季刊『コトノネ』発行人/編集長、自然栽培パーティ副理事長



2012 年に障害者の「働く」をテーマにした季刊『コトノネ』創刊。2008 年にドイツW杯で選手のいない写真集『106 EERMANY』出版。絵本に、『ボクも、川になって』、『もんばんアリと、月』、その他『いっしょが、たのしい』出版。共著で『農福連携が、農業と地域をおもしろくする』(2020 年 1 月)。日本ベンクラブ会員。

鈴木一郎太 (すずき いちろうた)

(株) 大と小とレフ取締役



静岡県浜松生まれ。20 代をアーティストとしてロンドンで過ごしたのち、地元の NPO で障害と社会をつなぐ文化事業に携わる。2013 年起業し、ウェブがジンやゲストハウス等の立ち上げ、福祉現場での文化事業企画、フリースペース運営、展示ディレクション等、事業主体の思いを整理し展望を見出す手助けをしている。静岡県文化プログラム・コーディネーター、NPO 法人こえとことばとこころの部屋理事、かけがわ茶エンナーレ 2020 ディレクター。

4

1.26,27

表現と障害 ~ナイトクルージング上映会~



人はわかりあえない

参加した視覚支援学校の先生は「視覚障害の人たちは瞬間 的なこと、その場で起きた瞬間のことが理解できない。そ れを説明するのに時間がかかる。だから彼らとは文化が違 うんだと思う。彼らの日常は私達が見ている美術が溢れて いない世界。だからお互いに自分たちのことを上手く説明 できるようになればいい」と感想を述べてくれました。お互 いが理解できるという根拠のない思い込みは、実は相手と の理解を妨げているという事実があります。上映会後のトー クで佐々木監督の第一声は「この映画は、人はわかりあえ ないんだという映画です」でした。わかりあえないからこそ わかり合おうとする、何かを一緒につくる、お互いの文化 を知る、違いを知ることをするのでしょう。全盲の加藤さ んと映画を一緒に作るドキュメントの中で、様々な技術、 様々な人達が、加藤さんの世界を具体化しようとします。 しかし、そこで生まれたものを視覚的に加藤さんが理解す ることはできない。だからこそお互いのイメージの摺り合 わせが、この映画のドキドキするところなんだと思います。

障害=コンプレックスではない

他の参加者からは「普段使っていない脳の部分を使うのが 面白いということなんだろう。新しいコミュニケーションは 新しい世界を見せてくれる。知っている世界を違う角度か ら見る、感覚を変えてみるときに面白さを感じる」という感想が出ました。この映画の説明をするときに「全盲の人が映画を作る過程を追ったドキュメンタリー」という言い方をしますが、この映画を見ると、視覚障害者への理解の促進や支援のお願いをしている映画ではないということに気づきます。障害を乗り越える、苦労して克服する、そういった話はよくありますが、それは障害者という括りでしかないことに気づきます。映画に表されていたのは障害が障害のある人の全てではないということ。障害がありつつも、その人の生き方は障害によって定義づけられるものではないということ。他の参加者からは、加藤さんはかっこいいという感想がありました。障害がその人のコンプレックスだと思っているのは、実はこちら側の勝手な思い込みなのかもしれません。

佐々木誠(ささき・まこと)

映画監督



主な劇場公開作品に『フラグメント』(06 年)、『インナーヴィジョン』(13 年)、『マイノリティとセックスに関する、極私的恋愛映画』(15 年) がある。他に『パイオハザード5 ピハインド・ザ・シーン』(09 年)、フジテレビ NONFIX『パリアフリーコミュニケーション』(14 年) などを演出。また大学等の講義のほか和田誠やロバート・ハリスとともにトークイベントも行なっている。













まとめ

貨幣経済に代わる価値観を、文化から作ることはできないのか

対話、表現、仕事をテーマにしたレクチャーシリーズでしたが、全体を通して感じたのは、生き方の話であったということです。人間とは合理的な生き物ではないということ、イレギュラーもあれば、寄り道もする。しかし現代社会は個人に対して合理的であることを求めてきます。レクチャーの中でも話に上がりましたが、近代教育とは、都合良く働く労働者を生み出す装置でした。時間を守らなくてはならない、与えられた役割をこなさなくてはならない、反発してはいけない、集団を乱してはいけない、と言われ続け、強いられるのが近代の教育です。時を経て、今の日本でも同様のことが行われ続けています。抑圧や上下関係は、

生き物としての人間を歪なものに変えてしまったのかもしれません。合理的というのは都合の良いもの、無駄のないものです。文化とは非合理的なもの、都合の良くないものも含みます。そのため合理主義の側から見たときに、無駄なもの、いらないものとされるのでしょう。だからこそ、人にとって文化芸術は必要である、非合理的なものであるから文化は人が生きるために必要不可欠なものだという考えはゲストの方々に共通していました。「文化によるソーシャルインクルージョン」をテーマにしたレクチャーシリーズが、人の生き方がテーマになったのも、当然のことかもしれません。







「天鈿女命育成講座」において、実は核と考えていたのが拠点運営事業でした。

ワークショップやレクチャー、シンポジウムは体験して終わり、話を聞いて終わり、ということになりがちなものです。体験したこと、学んだこと、感じたことを日常に還元するためには、日常性を持った事業の運営がどうしても必要でした。拠点は社会福祉法人いつか会さんのご厚意で貸していただきました。宮崎県庁の道を挟んで北側という好立地でできたことで、障害のある人、ない人だけではなく、宮崎県庁の職員が立ち寄るスペースとなりました。社会包摂と文化芸術に対する理解を様々な人達と議論し、対話が生まれたこと、またこの場所で様々なイベントや展覧会が生まれました。

この場所のコンセプトは「無目的な場所であるということ」。事業のコンセプトと別に無目的であることを大事にしたのは、場所が人を選ぶこと、排除を生んでしまうことを避けるためでした。歴史のある喫茶店という場所であったため、昔の話をしてくれた方、ふらっと立ち寄ってくれた方、多様な人達が集まるスペースとなりました。当初より様々な人達が集まることを期待していましたが、3ヶ月の間に集まった数は予想以上でした。

いつかベースのあゆみ

- 12.15 (日) アートステーションどんこや展覧会 「障害者芸術に入れられない愛おしい物たち」
 - **1.6** (月) レクチャーシリーズ vol.01「対話と nonverbal cue」
- 2 1.7 (火) 川浪千鶴さん、杉浦幹男さんをゲストにアートラウンジ「地域とアートと美術館」
 - **1.18** (土) レクチャーシリーズ vol.02 「表現は 壁を超えて」
 - **1.23** (木) レクチャーシリーズ vol.03「障害者が自分の仕事を作る方法」
 - **1.25** (土) ファブラボ宮崎βの会議会場として 利用
 - **1.27** (月) レクチャーシリーズ vol.04「表現と障害」
 - 1.30 (木)
 「遊び心と文化とコモンズ・デザイン ~陸奥賢講演会~」
 - **1.31**(金) 「宮崎で単価のまちづくりを考えるまちあるき」
 - **2.1** (土) 八田さん初来店。これをきっかけに 八田さんの展覧会が生まれる
 - **2.4** (火) 視覚障害者のためのブラインド囲
 - -5 (水) 碁の体験イベント
 - 2.7 (金) 美術館の役割のお話
- 3 2.8 (土) 八田さんの展覧会
 - **2.12** (水) どんこやさんの紹介で来店した村上 仁君とお母さん。これをきっかけに 展覧会の話に
- 4 7.13 (木) 村上仁君の展覧会
 - **3.11** (水) 宮崎県障がい者芸術支援センター の展示イベント
 - **3.15** (日) 木育&ウッドキーホルダー製作。大 淀小学校の保護者を含め24名が 参加
- 5 3.16 (月) ワークショップ「Connect chairs for Inclusion」

1

12.15sun

アートステーションどんこや展覧会「障害者芸術に入れられない愛おしい物たち」

アートステーションどんこやとの話の中で、 障害者芸術として括られるものは、 展覧会 や、様々な商品として広がっていくが、 そ

れは施設で作られたもののほんの一部であるということ。 そしてスタッフとしては愛おしいものはもっと別にあるが、 それはなかなか外に出す機会がないという話が出ました。 そういうものが持つ物語こそ、社会包摂には必要なのでは ということで展覧会を開催しました。



2

1.7 tue

アートラウンジ「地域とアートと美術館」

福岡で活動するインディペンデントキュレーターの川浪千鶴さんと、アーツカウンシルみやざきのプログラムディレクター杉浦 幹男をゲストに開催。地域におけるアート

の役割、そして美術館の役割とは何かを、20名の参加者と議論しました。参加者は宮崎のアート関係者、美術館スタッフを始め、ギャラリスト、行政職員など様々な顔ぶれが集まり、このテーマに対する関心の高さが伺えました。継続的な開催を予定していましたが、諸事情でできなくなったのが悔やまれます。



3

2.8 sat

八田さんの 展覧会



定年退職後、障害福祉施設のスタッフとして働き始めた八田さん。障害のある人との関わり方がわからず、とりあえず絵を描いてみました。これまで絵を描いたことがなかった八田さんでしたが、絵を介して人と関わることができること、そして絵を書く楽しみに目覚めました。そんな話をいつかベースでしてくれたので「じゃあ、展覧会をやりましょうか?」ということで開催。書き溜めた40点ほどの絵を奥様と額装して、こちらも一緒になって展覧会を作りました。八田さんの絵を目当てに多くの方が集まりました。

4 2.13 thu

村上仁君の 展覧会



アメリカから移住してきて半年程の村上仁くんとお母さん。 国籍が変わったため、宮崎市から療育手帳や障害者年金といった福祉サービスが受給されず困っているという話を聞きました。仁君が描く絵や粘土細工は丁寧で緻密で、作品として質が高いことに驚き、それを展覧会にしてはどうかという話から始まりました。総作品数は200点ほど。この展覧会の狙いは、この作品をきっかけに2人の居場所を提供し、様々な人との関わりが生まれることでした。会期中は仁君の作品を目当てに来る方が多く見られました。

5

3.16-23

ワークショップ

^rConnect chairs for Inclusion_J

「天鈿女命育成講座」の中で生まれたものを一つの形にしたいという思いが事業開始 当初からありました。またいつかベースの

建物はいずれ取り壊しが決まっているため、取り壊されるまでの間でもいいので、この場所を一つの作品のようにできないかと、宮崎県在住の造形作家、松下太紀さんに相談しました。そういうことなら、個人の作品ではなくたくさんの方と共同制作ということでワークショップを行おうという話でまとまりました。様々な人達が集まり、使ってきたイスも、いずれ取り壊しの際には処分されます。このイスを並べたとき、様々な人たちの顔が浮かび、それが一つにつながっていることを感じました。このコンセプトで生まれたのが龍のオブジェです。参加者一人ひとりが一つのイスの背もたれに絵を描き、それが龍の胴体としてつながっていく。全長10mほどの龍は路上に設置し、この場所を行き交う人

達の目に触れることになりました。イス同士がつながる接点のみを指定して絵の内容は自由にしたため、色も形も個人の思うままに描かれました。それがつながっていくことで一つの龍になることで社会包摂というテーマを視覚化できた作品に仕上がりました。



ファシリテーター: 松下 太紀 (まつした たいき)

1988年宮崎市生まれ。宮崎日本大学高等学校情報デザイン学科卒業。 宮崎県を中心に、平面・立体・パフォーマンスなどジャンル問わず活動。

「繋がり」を大切さは感じつつも、具体的に表現すればするほど言葉が多くなり、まとめるのに苦労しました。それを作品として視覚的に参加者と共有し、「繋がる事」「繋げる事」をより強く深く実感させてもらい、言葉じゃなくても伝えれる物、方法がまだまだあるんだと改めて感じました。(松下)



いつかベーススタッフ 鈴木ゆかりさんの感想



何か分からないけど面白そう!不安よりも ワクワク感が大きかったです。

社会包摂 (ソーシャルインクルージョン) という言葉を初めて耳にしました。生きていく面白さ、どう人と関わればいいのかを見直すきっかけがもらえました。知らない世界に足を踏み入れたようでワクワクしていました。この歳になっても感情が揺らぐ

ことを知り、人の繋がりって大切だと思うと同時に楽しいと感じる事ができました。 行き場がない人が行ける場所『いつかベース』は必要だと心から感じ、人として文化 はとても重要だと認識できました。また、いつかこういった場所に巡り合えることを 心から望んでいます!



まとめ

インクルージョンの場としてのまちなか

「いつかベース」の名前は、今回拠点をご提供いただいた 社会福祉法人いつか会さんに由来します。まちの中に障害 のある人の生活があることを大事にされているいつか会さ んは、この事業全体を理解していただき、快くスペースを 提供してくれました。というのも、いつか会さんのグループ ホームは宮崎のまちなかにあり、利用者さんはここから郊 外の作業所に出勤していきます。

「障害のある人の生活がまちなかにあるだけで、彼らは自分で買い物に行き、まちなかの人たちと関わることができる」という話を聞いたとき、ものすごくシンプルな形でインクルージョンを実践されていることに驚きました。まちなか

には様々な人達が集まります。目的も様々です。それ故にまちなかとは多様な場であると言えます。いつかベースにも様々な人達が集まりました。これは郊外や、公共施設といった場所では実現できなかったことです。場の目的性を優先して、多様な人たちを受け入れる場を作ってこなかったのは社会側の問題ではないでしょうか。そんなことを気づかせてくれたいつか会さん、武田さん、日高さんにあらためて感謝を申し上げます。

ちなみに、こちらのピザは激ウマです。

社会福祉法人いつか会 http://www.ituka.jp/







シンポジウム「文化とソーシャルインクルージョン」では「天鈿女命育成講座」の各事業の報告と、 県内の社会包摂の取り組みをご紹介し、播磨泰夫さんの基調講演と、パネルディスカッションを行いました。

社会包摂とは何でしょうか?

「天鈿女命育成講座」を通じて、私なりに考えたのは、社会包摂、つまりソーシャルインクルージョンとは、個人の思い、それぞれの物語を基盤にしたつながりだと思います。イデオロギー、宗教、生まれは違っても、会って話をしてみたら仲良くなれる。多様な人を受け入れることで、人は豊かになれます。そんな当たり前のことが、し辛い世の中になりましたもう、文化しか残っていません。2020 年東京オリンピック・パラリンピックそして、国民文化祭・全国障害者芸術・文化祭みやざき大会。それらを通じて言われるのがレガシーの創出です。レガシーとは継承するものです。今から作るものではなく、命のパトンリレーのようなものです。私達は、私達のレガシーを忘れていませんか。

宮崎はとても文化の豊かなところです。ただ、気づかないだけなのです。文化によるソーシャルインクルージョンとは、今ある場所や人だけでなく、これまでの時間、時空、歴史を含んだものであると思います。

事業報告「ダンスステージをつくるワークショップ」



山森達也(アーツカウンシルみやざき) んにお越しいただきました。

山森:ダンスステージを作るワークショップでは、子どもたちが自分たちの仕事として舞台芸術を作るというワークショップを行いました。今回はワークショップの講師をしていただきました、んまつポスのメンバーから、児玉さんにお越しいただきました。

光の当て方も、一つじゃない

児玉: 障害のある人達を舞台に上げて光を当てるワークショプというのは多くあります。今回私達は、舞台を作る、関わる側に障害のある人達がいるのも大事なのではと思い、このワークショップを実施しました。参加したのは2人の小学生。たくさんの参加者を集める予定でしたが、ワークショップを振り返ると、少人数だからこそ丁寧に実施することができたと思います。参加した2人が、照明、音響の仕事を将来やってみたいと思えたようで、今までとは違う職業感を得られた機会にもなったのではと思います。

山森:ワークショップを実施してみて、どう感じましたか?

児玉: んまつーポスの専用劇場で実施できたことで、参加者にとってもこちらにとってもやりやすく、人の目を気にせず、時間をかけて丁寧に自由にできました。

山森: ワークショップを見ていて思ったのは、参加者に教える形のワークショップではなく、彼らと一緒にステージを作るワークショップであったと思います。 んまつーポス側も彼らの要求に答え、お互いに作り上げていく対話型のワークショップだったと感じました。

児玉:パフォーマンスする際には、自分たちだけでは何もできません。照明さんや音響さん、舞台監督さん、さらには公演制作さんなど、サポートしてくれるみなさんがいないと作品は上演できません。今回のワークショップでも、対話が生まれるような雰囲気が作れたことで、参加者も含め複数の方の意見や議論が起き、うまくいったのだと感じています。

当たり前、思い込みを外すこと

山森:彼女たちの障害に対してどのような工夫を行いましたか?

児玉:上演芸術なので、作品が分かるまで繰り返し踊りました。また、分からないことをそのままにせず質問させたり、初めてダンスを鑑賞する人に、例えアクシデントが起きたとしてもそれを失敗に見せない努力をすることの必要性を伝えました。あとは、彼女たちが普段から使っているiPadを、こういう場でもうまく活用できていて、それは手応えを得ることができました。

山森:人が集まらなかったとおっしゃっていましたが、特別支援学校や、特別支援学級で、仕事の選択肢として、舞台づくりや、芸術に関わることというのはすごく少ないんじゃないかと思います。彼らたちのやりがいや喜びの中から、障害のある人の可能性として感じたものがあれば教えてください。

児玉:アートに関わることを考えたときに、パフォーマンス 以外でも、舞台づくりの仕事というのがあるはずです。し かし、目が見えないから舞台の仕事は無理という、当然の ように職業の選択が消えてしまうのはもったいない。んま つーポスの活動の中でも大事にしているのが、思い込んで いることを変えること。今回のワークショップでもそうでし たが、こうするのが普通という思い込みを外すというのを大 事にしています。

山森:最後に一言あれば

児玉:2006年にんまつーポスを立ち上げましたが、一人でできることなんて社会にはない。色んな人達が関わり、手を貸し合い、意見を出しつつ、試行錯誤をする中で、自分たちのやりたいことを社会につなげていくことが大事なのではないかと、今回のワークショップでも改めて感じました。



児玉孝文 (んまつーポス)

2

事例紹介「都城市総合文化ホールの社会包摂事業」

山森: 宮崎県における文化とソーシャルインクルージョンの取り組みの中で、都城市総合文化ホール(以下 MJ ホール)の取り組みは、全国的に見ても先行事例であると思います。今回、このシンポジウムでお話してほしいとお願いしました。それでは MJ ホールの徳永さん、お願いします。

MJホールでの社会包摂事業の始まりと変遷

徳永:都城市は宮崎市の隣。人口は 16 万人ほどで県内では第2位。MJホールは 2006 年にオープンし、社会包摂に関わる事業は 2016 年から始めています。

2016年には森田かずよさんのワークショップ、コンタクト インプロビゼーション C.I.co さんによる外国人を対象とした 言語を超えたコミュニケーションのワークショップ、菅原 直樹さんの介護と演劇のワークショップ等を実施してきまし た。2017年にも森田かずよさんのワークショップを拡大し て開催。障害のある人だけでなく、一般の方も参加者して ワークショップを重ね舞台発表を行いました。2018年には、 継続的なワークショップの開催を行おうということで、月に 一回「はぐくみのダンス」、そして聴覚障害の方を対象にし た「ふれあう事から始めるダンス」を実施。日常的にダン スや音楽に触れる機会、障害のある人に関わる機会を作る ということを大事にしました。これらのワークショップは、 ある日、障害のある人にとって、MJ ホールまで足を運ぶと いうことが難しいという声がありました。 そのため 2019 年 はこちらから押しかけていくワークショップを、野村誠さん、 佐久間新さんをゲストにお招きして行いました。

舞台が保つ力

この事業を実施した後に、施設のスタッフとの振り返りをしたところ、みんなと一緒にいることができない子が、ワークショップの間ずっとみんなといられたとスタッフが驚いていました。また、ある子どもの施設に行ったとき、参加した一人の子が、いつもできない膝の動きができるようになっていたと驚いていました。こちら側はワークショップを実施するだけで、いつもの彼らの姿を知らないわけです。見る視点が違うと、一つのワークショップの中で色々起きていることに気付かされます。でもそういう気付きや発見を我々や訪問先のスタッフ以外にもどう共有すればいいのかなというのが今の課題です。

そして舞台の力がある。 をと感じていとしたものを、ボヤッとしたが、ボてもらう機になります。「舞台になります。「舞台になります。」とが、照明なる」となる」となる。といい、に言われた時、減さんに言われた時、



徳永紫保 (MJホール)

それが舞台芸術の力なのではと感じたので、このあたりは 今後開拓していきたいと思っています。

ダンスの中では、お互いに手と手を合わせるときに、どうすれば手を合わせられるか、どの位置に行けばいいのか、顔を見たほうがいいのか、手だけでいいのか等をお互いに試行錯誤をします。こういった対話の試行錯誤が日常的になれば、社会はもっと豊かになれると思います。障害のある人もない人も参加することで、自分の肩書や役職を取っ払って、個人が個人と向かい合うことができます。寄り添うために工夫することがダンスにできること、そして劇場やホールの役割なのかなと考えています。

協力してくれる福祉施設に、野村さんと佐久間さんの写真を見せて説明しても最初は「ん?」という顔をされてしまうが、続けていくことで、施設側から「こんな事はできますか?」「こんなことをやってほしい」と希望が寄せられるようになっていきました。こういう取り組みは、一回きりでは何もならなくて、走り続けること、走り続ける体力が必要です。

文化芸術がかける虹

最後に、たんぽぽの家の岡部太郎さんがおっしゃっていた 言葉をご紹介します。

「私達の仕事は、ピラミッドの山の頂点を作るのではなく、山だと思っていたものを谷にし、海に、平野にする、そんな地面を作っていく仕事で、それをみんなで伸ばして、広い平野を作っていく仕事。その平野を作ることで、新しい文化や生き方を、障害に関わりのない人と共に実感したい」その平野に虹をかけるのがホールの仕事なのではないかなと。色んな人がいろいろな場所から眺められる虹をかけることが文化芸術の役割なのではないかと思っています。

3

基調講演 播磨靖夫

(一般財団法人たんぽぽの家理事長、社会福祉法人わたぼうしの会理事長)



播磨 靖夫 (一般財団法人たんぽぽの家理事長、社会福祉法人わたぼうしの会理事長)

宮崎は久しぶりで、5年か6年くらいは来ていないのではないか。色んな話を懐かしく聞いていると、この宮崎の良さが滲み出ているような話がでてきて、人間的ですごくいいなぁと思いをあらたにしました。今日は短い時間ですが、「文化と社会包摂」というテーマでお話をさせて頂きます。

芸術文化を通して幸福で豊かに生きる営みは、 すべての人の権利

この人生は、さまざまな感情の叫びにほかならない。私たちの人生は本当に短いけれども感情の叫びである。そういうのを人生で貫いているという事です。それから表現・芸術・文化が生まれてくるわけですが、生きることは表現すること、表現することは生きることではないでしょうか。

今日の一番大事なテーマは、芸術文化をとおして、幸福で豊かに生きる営みは、すべての人の権利である。障害のある人もない人も全て芸術文化を通して豊かで幸福に生きるということが重要である。これは憲法にも書かれていることなんです。

去る I 月 25 日に鳥取の倉吉という所で「鳥の劇場」の演劇を見に行きました。シェイクスピアの芝居と都城の永山智行さんの「こふく劇場」の芝居が合体していました。その中で、周りの者が障害のある人の代弁する、共に生きるとか言いながら、それは障害のある人を使っているだけじゃないかという永山さんの風刺が非常に印象深く思いました。

夢を夢に終わらせない

今から50年前に新聞記者をしていて、当時の特殊学級の 先生達や親が語っているだけで、当事者の声はなかなか 僕の元に届いて来ないことに疑問を感じたわけです。なぜ 障害のある人達は自分たちの想いを主張しないのか?それ は、表現する力が弱い、表現する術を知らない、表現して も受け止められた経験が少ないという事に気付いたんです。 そこで障害のある人が自分の想いを世の中に伝えるという、 何か仕掛けがないかと考えました。そして養護学校の先生 に「詩を書いてくれ」とお願いしたら、「夢」という詩が送ら れてきました。

【車椅子に乗って僕は考えた、車椅子に座ってデートが出来るだろうか。この頃、そんなことを考えてしまう。僕だけ、僕だけ他の世界にいるみたい。みんな同じ空の下生きていく】この詩を作ったのは 16 才の脳性麻痺の方で、手が使えないから足の指にえんぴつをはさんで大学ノートいっぱいに詩を書いてきたと。その詩をもっと多くの人達に届けるためにどうしたらいいのかと考えて、音楽の好きな若者たちに詩を渡しメロディをつけて"皆で歌うコンサートをやろう"と、これが『わたぼうしコンサート』の起こりなんです。今から46年前に始まって、その翌年から全国の音楽祭というのを始めるわけです。宮崎でも"わたぼうしコンサート"を続けてやって頂いてるようで、本当にありがたいことです。その思いをあちこちで広げていただいています。

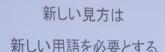
スターもいないし、アイドルもいない、そしてとり立てて大きなスポンサーも無いところで 45 年続いたのは何故かというと、これは市民の意識から生まれたからです。『共に生きる』という市民の意識がこのわたぼうしを作り、そしてその精神を市民が支えているということじゃないかと思うんです。



弱の強に勝ち 柔の剛に勝つ

僕は新聞社を辞めて障害のある人の自立の家づくりとかに関わってきたんですけれども、福祉の先輩から『福祉はね入口は色々あるけれども出口はないんだよ』という強烈な言葉を聞いて驚きました。確かに入口はあります。芸術とか文化とかあるんですけれども社会に壁がいっぱいあるという事が分かったんです。 I つは偏見・差別。あと行政の壁です。今、日本では、障害者施設だけでなく、高齢者施設、あと幼稚園とか保育所も地元が反対して作れないという状況です。 綺麗な言葉で "共に生きる"と飛び交っているけれども、そこの差別構造が変わってないということなんです。その固い壁を破るためには何をしたらいいのかというのを考えたとき、僕の出会った本の中にこういう言葉があったんです。

「弱の強に勝ち、柔の剛に勝つ」これは老子の言葉です。 強さよりも弱さにこそ力がある。この弱いものとか柔らかい もの、これは何でしょうか?これは芸術文化なんです。我々 はよく芸術立国とか文化は大事だとかをいいますけれども 実際はあまり本気に思ってない。しかし、弱そうに見える ことの強みを活かし、分け隔てることの落とし穴を理解し、 世界を相互に関係あるものに変えていくという事が芸術文 化にはできるという事です。別の言い方をしたらバラバラな 要素を繋いだり、感じとったり、働きかけをする事で弱い ものは力を持つということが芸術文化にあるという事です。



新しい見方は、新しい用語を必要とする。 ABLE ART MOVEMENT

1995 年にエイブル・アートという概念を提唱して運動を起こしました。従来のアートとか芸術との枠組みの中では発想できないから、新しい見方には新しい用語が必要なんです。エイブル・アートとは、アートと社会の関係性を見直すということなんです。アートが社会と関係を結ぶことによって新しい展開があるんじゃないかという発想でエイブル・アート・ムーブメントを提唱したんです。これは直訳すれ



ば『可能性の芸術運動』です。この可能性の芸術運動の元は可能性感覚なんです。つまりこれまであるものを絶対視せず、別様でもありうるという感覚なんです。アートとは一部の人のもので、一部の人が享受するというものから、その取り巻く日常的状況をより深くより美しく変革する行為、これを芸術と言おうという芸術の再定義を始めました。

哲学者の三木清が「創造するということは、フィクションを つくること。フィクションの実在性を証明すること」と言っ てます。僕は50年近く障害のある人のアートに関わってき ました。昔は障害のある人が芸術文化活動をするなんて言っ たら誰も信じなかった。だからアートは環境さえ整えば障 害がある人の持っている種が芽吹くっていう事を証明した。 そこで考えたのは福祉施設にアートセンターを作るという 大胆な発想です。反対するスタッフも圧倒的に多かったで す。でも、「やってみなはれ」精神でアートセンター HANA を造りました。そして、Good job! センターを香芝という所 に作りました。ここは、障害者アートにデザインを加えて、 ビジネスに繋げていくという考え方でやっております。アー トセンター HANA は身体障害・知的障害・精神障害の人 がいますけれども、香芝は発達障害と精神障害の人の割合 が多い施設ですね。香芝・広陵町というのは日本一の靴下 産業の集合地なんですよね。そこが中国の安い靴下に負け て、だんだん落ち目の時になった時に Tabio という全国で チェーン展開をしてる会社の会長が「障害者アートで何かで きないか?」というアイデアを出されて一緒に作ったのが、 こういうユニークな靴下です。これは若い人たちに物凄く 売れるんです。こうして地場産業と繋がりながらアート・デ ザイン・ビジネスを展開をしています。宮崎でもあったそう ですけれども「lot と Fab と福祉」というテーマで新しい技 術を障害者のアートの中に加えていくという事も展開してい ます。

芸術とは、その取り巻く日常的状況を より深く美しいものに変革する行為

それでは、アートとは何か?という事をお話したいと思いま す。よく聞かれるのは『障害者アートはどういう基準で良い のか悪いのか、美しいのか美しくないのかを決めてるの か?』という質問です。美というのは3つあると思います。 自然の美と、伝統の美と、日常生活の美。宮崎なんかは 海岸線なんかは綺麗だし、緑も多いし、いい景色もいっぱ いあって自然の美に溢れている。伝統の美というのはハイ アートとかポピュラーアートです。これはみんなが美しいと 言うのが基準になって決めているものです。そして、障害 者アートは日常生活の美、日常生活の中で生まれている美 なんです。日常の美をどう見るかというのは1つ大きなテー マなんです。伝統的な美というのは、美的感覚という言い 方をしていますね。ところが障害者アートというのは感性な んですね、感性的な美しさです。感性とは何かというと直 感なんですよ。開高健が「感動は一瞥にあり」と言っていま した。つまり専門家とか色んな人や有名人が良いと言った からじゃなくて、見た瞬間に「ガツンときた!」とか、これ が日常の美なんです。

美学者が言った言葉を引用しますけれども「マルセル・デュシャンの「レディ・メイド」以来、技術の重要性が後退する中で、素人の芸術実践からプロフェッショナルが排出する可能性がある。」マルセル・デュシャンという人は男性の小便器にサインを描いて展覧会に出して、それをアートだと言った。そういう革命的な人がいて、昔のように知識と技術がいるアートではなくて直感や感性によるものがアートだという考え方が今、現代アートとなっております。

もう一つ大事なのは、一人ひとりの物語を聞くナラティブセラピーというのがあります。高齢者の聞き取りをしながら物語を聞く。人間というのはどんな人でも個性と文化と役割があるんです。だから一人ひとりに物語があるんですね。





そういう物語を聞いていくという事が非常に重要です。アートも作品の中に一人ひとりの中に物語がある、それに対話しないと駄目なんです。

私は花を見る/花は私を見る コレクターの視点からの脱却

これはぜひ言っておきたいのは、障害者アートは今、アール・ ブリュットとかアウトサイダー・アートと呼ばれています。 いわゆる美術教育を受けていない人のアートがアール・ブ リュットの本来の意味です。しかし今、現代アートの作家 の60%以上が美術教育受けていない人がやっていますが、 そういう人達の作品をアール・ブリュットと言わない。障害 者だけにアール・ブリュットと言う。これはおかしい。実 はアール・ブリュットとかアウトサイダー・アートという名 前はコレクターの視点なんです。コレクターが勝手に名前 付けて囲いこんでるわけです。「私は花を見る」はコレクター の視点。でも、「花は私を見る」「作品と対話する」これがな いとおかしい。中国の思想家、荘子の話で「胡蝶の夢」と いうのがあります。ある日"胡"という人が蝶になった夢を 見るんです。夢から覚めてハッと気が付いて、蝶が"胡"になっ たんじゃないか?つまりどういう事を荘子は言っているかと いうと、固定的な見方はしてはならない、逆の見方もある。 という事なんです。コレクターの視点で高く売れるとか展 覧会に飾れるとか、そういう視点じゃなくて一人ひとりの表 現に向き合うという姿勢が必要ではないかと思います。

美は幸福を約束する

HANA のアーティスト十亀史子さんは一生懸命に人の顔ばかり描いています。十亀さんの展覧会に NHK が取材に来て『あなたは何で絵を描くんですか?』と聞かれると『みんなが Happy になってほしいから』と答えました。僕はそこに感動しました。この他者に Happy になって欲しいという思いですね、他者への気遣いとか愛情とか思いやりとか、

そういうところが芸術文化には非常に大事なんです。自己表現だけしてすごいものを描いてます!ではなくて他者へ贈り物を届けるという贈与の感覚が大事ですね。ちょっと言葉を添えますと、「美は芸術にとって必要なものではないが、人生には不可欠だ」という事です。

和歌山でプロジェクトをやるとき、世界遺産、熊野古道のパロディで「世間遺産」をやったんです。世間遺産では、次世代に送る、かけがえのないものを写真で撮るという子供達向けのワークショップを写真家と一緒にやりました。常日頃ゲームで遊んでいる子供達が夢中になって写真を撮るのですが、登録できるのは3点のみなんです。この画を絞るのが大変なんですよね、子供が四苦八苦してウワーっとか言ってて、選ぶ行為、これがいいんですね。これがワークショップの面白さで気づきなんです。私たちの身近にあるものでかけがえのないものがいっぱいあるんです。

プライベート美術館というのは、障害のある人の作品とお 見合いしてもらって、自分のお店などに飾るというプロジェ クトです。レストランとかお店のご主人とか、あるいは公共 施設とか色んな人がやってきて作品を持って帰って一定期 間飾る。ある時、喫茶店に飾っていたら絵を、親子連れ が窓ごしに覗いて見ていて、この絵を描いた知的障害の親 子でした。「中に入ってお茶でも飲みましょう」と話しました。 そこから人間関係が生まれてきますね。そこでマップを作っ た。これにはお店の良さとか書いてあります。何が美味し いとか何が売りかとかいうのを見ながらツアーができるんで す。我々が何を目指しているかというと市民教育なんです。 偉い人が良いとか悪いとかではなくて、自分の感性で選ん でいくという市民教育の一つなんです。そういうのを地域 やコミュニティの中で発展していきました。これはチャリ ティーなので、同情でなんとか飾ってくれている、というの ではなくて市民が自分の目で選んで持って帰るという行為 が非常に大事なんですよ。





その際「何がいいですか?どこがいいのか?ポイントなんかあるんですか?」とよく聞かれます。ギリシャの女流詩人サッポーの言葉で「地上でもっとも美しいものとして、ひとはいろいろ挙げるけれど、もっとも美しいのはあなたの愛するもの」というのがあります。これは分かりやすいですね。好きなものはやっぱり一番美しいと思うんですよね。自分の好きなものを自分の感性で選んでいくという行為がものすごく重要であるという事なんです。

人間は不完全で、有限な存在

人間を英語では Human being と言いますが、今日では Human co-becoming、co=共にというのが大事なんです。 人間は I 人で自立していくわけではなくて、色んな関係が あって人間になっていくんです。それはまた「私は、私と 環境である」、良い環境を作れば眠っている種が芽吹いて 開花していくということなんです。これを Good Job! センターとアートセンター HANA は見せったって事なんですよね。 はじめはフィクションのような夢のような話と言われたけれ ども、実際になっていったという事です。

最後にサン = テグジュペリの星の王子さまからのメッセージ 読み上げて終わりたいと思います。この中で出てくる星とい うのをアートという風に置き換えて聞いてもらえると嬉しい ですね。

「その星は小さすぎて見上げても分からないだろう。でも、 そのほうがいい。僕の星は夜空いっぱいの星の中のどれか 一つになる。そしたら君は夜空全部の星を見るのが好きに なる。全部の星が君の友達になる。」

アート全体をみんな好きにならなきゃ駄目なんです。障がい者アートだけが素晴らしいわけじゃない、アート全体をみんなで楽しみ・みんなで作り上げていくという時代が本当に豊かな時代であると思います。

シンポジウム ゲスト:生駒新一郎、大塚千枝、播磨靖夫

山森: 事業報告、事例紹介、基調講演をうけて、3名の ゲストの皆様と議論を深めていきたいと思います。まずは、 牛駒新一郎さんからお願いします。

生駒: あわいやの代表をしております生駒と申します。あわいやは福祉事業をしていますが、一般的な福祉施設と比べるととても小さく 20 坪程度に 8 人ぐらいの利用者と過ごしています。 2017 年に場所を構えるようになりましたが、先程話をされていた MJ ホールの徳永さんとは、それ以前からのお付き合いで、毎月ダンスワークショップをしてもらっています。

あわいやのあわいとは間のことです。いろんな時間の経過や一人ひとりが感じていくものを大事にしたいという思いからこの名前にしました、個人の表現の時間を大事にしつつ、社会との接続、交わりを作っていきたいという思いで活動しています。

山森:続いて大塚千枝さんお願いします。

大塚:厚生労働省で障害者芸術活動支援専門官をしている大塚千枝と申します。2020年度宮崎県では国民文化祭と障害者芸術文化祭が開催されるので、宮崎のことを勉強させてもらう機会をいただいてありがとうございます。

山森:播磨さんの基調講演のご感想をお願いします。

生駒: Good Job! センター香芝やアートセンター HANA の活動という、今と向き合う活動は興味深かったのですが、その背景には播磨さんが、古典、歴史、文化に対する造詣の深さ、社会に対する機会やきっかけの作り方の深さを感じました。これは播磨さんの愛情の深さゆえだと思います。



生駒新一郎 (あわいや代表)

大塚: 今回のシンポジウムの中で紹介された様々な事例が とても面白くて、レクチャーシリーズのゲストも、アーティ ストや編集者、就労の関係者等多角的な視点で作られてい るのが羨ましかったです。そして今回様々な方が話をされ た中で、いろいろな共通点がありました。既存のもの、当 然とされているものが当たり前ではない、それに変わるも のの可能性を見ていくことが Co-becoming なのかなと。 そ して壁を壊していくことが大事だということ。ダンスステー ジを作るワークショップで、照明や音響のスタッフとして障 害のある人達に関わってもらうことは新しい可能性を感じま した。行政が不得意なところを民間がやっていく中で、行 政がどれほど一緒に関われるのかがこれから問われると思 います。そして、播磨さんがおっしゃっていた「Co-」のと ころは、んまつーポスの児玉さんがおっしゃっていた、ひと りじゃないという事なんだと。厚労省では障害者芸術文化 活動支援センターを全国に設置していますが、この中で協 働評価 (co-evolution) というのを今後進めていこうとして います。センターや厚労省が一方的に事業を評価するので はなく、様々な福祉の関係者や、地域の方と一緒に評価 することを考えています。

あと、播磨さんの言葉の中で気になったのが「一人ひとりの物語、ナラティブ」という言葉。成果を見えやすくする点数化や、数による評価にはない力をナラティブは持っています。文化人類学ではライフヒストリー、個人の物語を大事にする視点がありますが、播磨さんの話の中でも一人ひとりを大事にする力を感じました。

山森: 物語という言葉、ナラティブのところをもう少し播磨 さんにお話しいただけますか。

播磨:ナラティブとは介護や医療といった、ケアの世界で使われている言葉です。一人ひとりに物語があり、その物語を聞くことが関係づくりの前提であるという考え方です。十把一絡げに高齢者、障害者と括るのではない。感じ方や思いというのは個人で違う。一人ひとり異なる生きた物語に、真摯に向き合うことから社会を作っていくことが大事。最もクリエイティブなのは個人に向き合うこと。アートは個人がそれぞれ違うことを見せられる。物語を語ること、それを受け止める事、そして芸術につなげることが我々の仕事だと思いますね。



大塚千枝(厚生労働省 障害者芸術活動支援専門官)

生駒:個に還るということは日常ですごく感じることです。 社会の中で個が削られていく、消されていくと感じる中で 何ができるのかということ。あわいやの現場もそうですが、 一人ひとりが抱えているもの、痛みや辛さを消化すること、 なにかに変えていくことではないか。人との関係性や地域 との関係性において、個人の物語との対話が、個人の輝き を増していくのではないかと思います

大塚: 一人ひとりが持っている物語はすごい力を持っていますね。行政で制度を作るときには、どうしても障害のあるご本人の言葉だけではなく、人づてに伝わった言葉、誰かの声に翻訳を重ねた言葉が届くことがあるのですが、播磨さんがおっしゃっていた、個性と文化と役割を持つ、一人ひとりのナラティブを反映させたいと思いました。

播磨:3つ大事なことがあって、ひとつが個人の尊厳、二つ目が人間の尊厳。これは間やあわいの中で育つもの、もう一つが生命の尊厳。欧米は自然に対して克服する乗り越えていく、支配するという感覚が強いんですが、日本は自然と共ににあるという考え方です。人間は自然の一部であるという感覚が強い。宮崎はまさにそういう場だと思う。今回よく話に出てくる佐久間新さんのやっているジャワ舞踏はまさにそれで、自然の中から踊りを生み出していますね。閉じ込められた宇宙を開放していく、つまり表現とは宇宙に繋がる生命の凝縮。これは東京では難しいんです。でも宮崎は日常的にそういう環境にある。宮崎の人たちはそれが当たり前過ぎてありがたがらないが、宮崎は宇宙観の組み立てから芸術を生み出していく事ができる場なのではないかと思うんです。

山森:今回ご登壇いただいた皆さまや、関係者からのコメントをお願いします。

児玉 (んまつーポス): 僕らんまつーポスは年間かなりな数の特別支援学校や特別支援学級でワークショップを行っていますが、そんな中でアーティストとして、SDGsや社会包

摂をしっかり考えなくてはいけないといつも思っています。 今回の話を聞いて新しいステージ、新しい展開に飛んでい かないといけないと思いました。

徳永(MJホール): ワークショップも含め、社会って何か、地域って何かを考えた時、一人ひとりの集まりなのだと思います。 ダンスは一人の人と向き合って、言葉を介さずに身体を使って永遠に対話ができるもの。 だから、地域に対して、社会に対してできることがあるんだと、勇気をもらいました。

愛甲(宮崎県障がい者芸術文化支援センター):生駒さんがおっしゃっていた個が削られていく現状というのをいつも感じています。障害者アート、障害者芸術の拡がりの一方で、展示会の数や来場者数で評価されていて、これはこれで大事なことなんですが、ナラティブ、日常生活の中や、そこでの思いや背景が作品の向こう側にいっぱいあります。作品だけで伝わらないもの、作者だけではなく、支援員や家族の日常や思い、新しい発見や気付きというものを打ち出していくことから、「Curation for Social Inclusion」という事業の中で Co-work、共同で展示を作っていくというコンセプトを打ち立てました。これを今後発信していきたいと考えています。

大塚:今話があった Co-work をはじめ、宮崎には魅力的な活動がたくさんあるのを今日知られてよかったです。来年度の国文祭・芸文祭の宮崎大会に向けて今からとても楽しみです。

播磨:世の中に新しいものを打ち出すには、華麗なる独断と、爽快なる偏見が必要なんです。障害者がアーティストになるというのは独断と偏見、それを、爽快なるもの、かっこいいものとしてやらなきゃならない。これが僕の長い経験からの一つの結論です。もっと大きな話をすれば、今は文明の大きな転換期にあると思うんですね。AI やバイオテクノロジーが発展する中で、個人の尊厳、人間の尊厳、生命の尊厳が脅かされている時代に差し掛かっています。みなさんの日常生活の中に生きる意欲、つまり創造活動を積み重ね、織り込んでいかなくてはならないんです。この小さな積み重ねが、新しい気づきを産み、新しい文明を築いていく、こんな議論が今日宮崎でできたこと、このシンポジウムで語られたのではないかと思います。

山森: 長い時間のシンポジウムに皆様ご参加いただきありがとうございました。そして、ゲストの皆様に盛大な拍手をお願いします。本日はありがとうございました。

社会包摂は、文化芸術の最先端である

アーツカウンシルみやざきが設置されてから、 | 年足らず。県内から寄せられる相談件数は | 100 件近く。「文化のよろず相談所」と掲げた新聞広告を出したとき、「妻と別れたい」というおじいさんから電話がかかってきました。よろず相談所という部分を見てかけてきたんでしょう。笑い話なのですが。もしかして、このおじいさんは寂しいのかなと。あらためて考えると、寄せられた相談の多くには社会包摂がテーマになっているものが見られます。「メンバーの高齢化と、お客さんの高齢化をどうしたらいいのか?」「参加者の中に発達障害の子がいて、不登校になってしまっている」そんな相談が結構多いことを考えると、今の社会がどれだけ分断が進み、どれだけ孤立化が進んでしまっているのかを思い、心が痛くなります。

もう文化しか残っていない、と切実に思います。分断を超え、人とつながることが困難な時代の中で、文化芸術に求められる役割は柔軟な再接続ではないでしょうか。この事業では障害者を特に取り上げましたが、社会的排除を受けている人たちはたくさんいます。そしてその人達に共通するのが、社会参画の手段の喪失です。文化芸術が再接続の手段となるためには、文化芸術の価値を高めることであり、そしてそれぞれの文化の違いを受け入れ合う寛容性だと思います。

シンポジウムでは、宇宙から古代、そして現在と様々な テーマが議論されましたが、私達のインテリジェンス は時間を含めた多様性によって養われ、それが共に生 き残る術になるのではと思います。



天鈿女命育成講座

報告書

編 集: 山森達也 テキスト: 山森達也

デザイン: 平野由記 (ウフラボ)

撮影: 宗彩乃(ミチプロ)、鈴木ゆかり

発 行: アーツカウンシルみやざき(公益財団法人 宮崎県芸術文化協会)

発 行 日: 2020 年 3 月 23 日

令和元年度 文化庁委託事業

「障害者による文化芸術活動推進事業 (文化芸術による共生社会の推進を含む)」

本事業についてのお問い合わせ

アーツカウンシルみやざき (公益財団法人 宮崎県芸術文化協会内) 〒880-0804 宮崎県宮崎市宮田町3番46号 宮崎県庁9号館3階 Tel. 0985 (38) 1150 Fax. 0985 (31) 2782 Email yama@miyazakigeibun.jp

アーツカウンシルみやざきについて

2019 年 6 月に宮崎県からの委託を受け、宮崎県芸術文化協会内に設置しました。キャッチフレーズは「文化のよろず相談所」。2020 年国民文化祭、全国障害者芸術・文化祭宮崎大会を契機として、宮崎県内の文化活動の活性化に向けた体制の強化を目的としています。文化芸術の専門家によるさまざまな支援を通して本県文化力の向上と魅力ある地域づくりを目指します。

